「天文月報 200 巻記念特集号発刊にあたって」

IAU の月刊機関誌である「Tenmon Geppou」は，1907 年の創刊以来，ついに 200 年の記念すべき年を迎えた．

Tenmon Geppou は，もともとは旧日本天文学会の月刊機関誌「天文月報」であった．この 100 年間の学問とテクノロジーの進歩は目覚ましく，それにつれて，天文月報/Tenmon Geppou は大きく変貌した．

最初の 50 年間には，2015 年の紙媒体の廃止と電子媒体への完全移行，2023 年の国際言語化，2025 年の記事の 3 次元化，といった大きな転機があった．2040 年の日本天文学会のアジア天文学会への発展的解消に伴って，アジア天文学会誌への移行した．2050 年頃には，量子ユビキタスネットワークを通じたリアルタイムの 4 次元通信が実用化となり，大昔の「ブログ」に似た個人ベースの情報交換が主流となった．そのため，毎月学会が発行するスタイルの情報誌の存在意義が問われることとなった．

しかし，その後の十数年間，歴代の Tenmon Geppou 編集長の尽力により，Tenmon Geppou は，ユビキタスネットワーク上に存在するあらゆる宇宙に関する情報を多言語で統一的に参照できる存在として発展し，2083 年の IAU 総会でついに，IAU の公式機関誌として認められるに至った．その際，学会誌の名前として，「Tenmon Geppou」が採用されるにあたっては，当時の IAU 理事長で，日系イタリア人のトサーノ氏の尽力があったと聞く．

本特集号は，紙媒体ベースだった 100 年前を偲んで，当時のカテゴリーに応じた記事を当時のスタイルで再現した．表紙にも，1907 年から 2040 年まで使われた，「天文月報」という漢字のタイトルを入れた．現在では，あらゆる記事は，国際言語で書かれているが，100 年前には，まだ日本語（と英語のアブストラクト）の記述が行われていたので，今回の特集でもそのスタイルを踏襲した．表紙も，100 年前のスタイルをまねたが，今となっては貴重な「紙」を使うわけにはいかず（100 年前にはなんと自然の木材を原料に紙を作っていたのだ），シミュレーションにより，「紙」の感覚を再現したつもりだったが，いかがだっただろうか．

翻訳は，各執筆者が人工知能翻訳ロボットを用いたが，ロボットが参照した歴史データベースのバージョンの違いにより，各記事間に微妙な矛盾点が生じている可能性がある．その点，ご容赦いただきたい．

Tenmon Geppou 編集長

2107 年 1 月